古道探索シリーズ『黒砂将門落武者伝説』に原氏が絡む?? 新たな伝説!!

千葉氏を語る会　2022.11.15　**野 村 康 裕**

はじめに(黒砂には伝説が多く埋まっている)

このコロナ禍、遠出はままならないので、近場の散策をしております。　昨年は主に近場の川筋、花見川・草野水路・葭川の源流を探るといったコンセプトで彷徨歩きました。　それは海岸線に対して縦に歩いたわけです。　今年もコロナ禍は続きそうなので、続きは海岸線(尤も埋立て前のですが)に沿って歩いてみようと考えました。　海岸線に沿ってというと、古代東海道や房総往還という名前が浮かび上がってきます。　幸にも私達が住んでいる近くをそれらの古道が通っていたという事実が有るのです。　日頃は聞いたり、考えたりする事も殆どありません。　私達の周りでは、よく「御成街道を歩く」とか、「成田街道(成田道)を歩く」ということは聞きますが、「稲毛の古代東海道を歩く」なんて聞いたことも有りません。　房総往還はグーグル地図にも出てきますが、古代東海道は何処を通っていたのかと言われても検討もつきません。　そこで、そんな古道が何処を通っていたのかを探索するのも面白いのではないかと思い始めたのです。

昨年黒砂の伝説「将門の落武者」の話を複数の人から聞かされました。　何処かで郷土史の講座・講演があったのでしょう。　また黒砂浅間神社を訪れて感銘を受けたという話も聞きました。　その神社は、もともとは黒砂神社といい、将門を祀っていたらしいが、江戸時代になって浅間神社に衣替えしたという。　そんな話を聞いている内に、伝説に沿って歩いてみるのも面白いのではないかと思ったのです。　古道に沿った地域の史物(史跡とは限らない)、史話(伝説・言伝えを含め)を探索している内に、ひょっとすると古道の様子が浮かび上がるかも知れないと思うようになったのです。　「黒砂将門伝説」以外に、黒砂には『更級日記』も絡んでいるのにも気づき、まずは「黒砂」に焦点を当てて見たというわけです。

いろいろ調べる内に黒砂には伝説的なことが多いのに少し驚きました。　①940年の「将門落武者伝説」、②1021年の『更級日記』、③1450～1600年頃の中山殿と原氏の絡む伝説。④江戸後期の黒砂神社から浅間神社への衣替えと説明がつかないけれど、一本の筋に繋がっているのではないかと思われる伝説ストーリーが浮かび上がってきたのです。　今回は「千葉氏を語る会」でのお話しなので、原氏を少し介在させてみました。　原氏の知られざる一面が炙り出せるきっかけとなれば幸なのですが。

目　次

1．黒砂を初めて訪問
2．黒砂将門落武者伝説
　2-1.　黒砂の由来と将門伝説
　2-2.　平将門の乱
　2-3.　臼井の出城も落とされる
　2-4.　落武者逃走劇
　2-5.　黒砂の落武者
3．中山殿に原氏が絡む ??　新たな黒砂伝説 !!
　2-1.　原胤房末子中山胤宣とは
　2-2.　市川・中山に「原宮内小輔胤義」現れる
　3-3.　『千学集抜粋』の中山殿
　3-4.　原氏系中山氏の名字改変
　3-5.　黒砂の中山氏の没落はあったのか
4．浅間神社と江戸時代の黒砂村

1．黒砂を初めて訪問

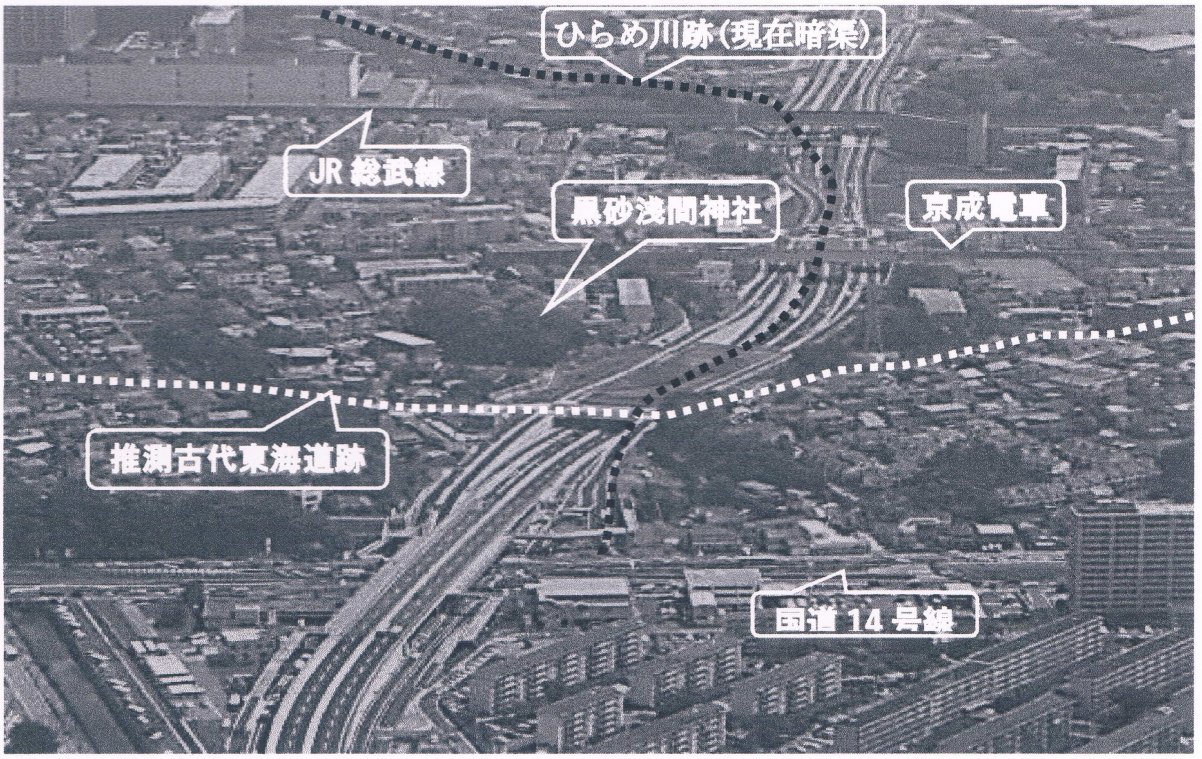
今年の正月に稲毛浅間神社の参拝の後、黒砂の谷間に行き、黒砂浅間神社にも参拝してきました。　近くに住んでいながら、40年近く訪れたこともないという不義理というか無視をしてきた訳で、今まで脚を向けなかったことを深くお詫びして、お詣しました。

浅間神社から１４号線に沿って、稲毛陸橋の下を潜って、暫く崖下(稲丘直下)を進むと黒砂の谷間に着きました。　眼前には１４号線を跨ぐ新しい道路(穴川から海岸方面に延びる、新港横戸町線)が現われました。　山側にはこの道路を跨いで、稲毛側と西千葉側の両台地を結ぶ道路が１４号線と並行に走っています。　つまり目の前のこの新しい道路は、黒砂の谷間をトンネルとして抜け出てきた(稲毛区役所でトンネル化され)のです。　そして、この３層構造の立体道路化した更に山側には京成電車、JR総武線がそれらの上を走っているのが分ります。

この複雑な面白い地形を眺め、川跡・谷間の底は道路の開通で全く後影も無くなった中を、古代の姿を懸命に思い浮かべました。　この辺りは東京湾北部海岸段丘の切れ目(谷)から小川が流れ出て、黒砂のデルタ(川洲)が僅かにあったのでしょう。　そこを古代東海道(８世紀前半築造)が通っていたという。　更級日記の作者は11世紀に、この地を訪れたとされており、8世紀以降の千葉-市川を結ぶ旅程の通過点であったのでしょう。　そこには「将門の落武者伝説」も伝わるという。　何故そんな人に知れずには居られないような地で安住できたのであろうか？　近くに隠れ里になる場所でも存在したのか？ 等といろいろな空想が湧いてきます。　道路建設前に訪れていれば、もう少し谷間の原形が残っていたのではないかと、今更ながら興味を抱かなかったことを悔やんでいます。

将門伝説の落武者として中山、高橋、渡辺、遠藤、山本、春山の６人の名が残されていて、現在でもその名字のお宅がそれぞれ何軒か残っているのが見受けられます。

黒砂浅間神社は14号線から見て、稲毛台(稲丘)の東端に高木がこんもり突出ている鎮守の森と一目で分かります。　鳥居は東端の道路に面しているが、そこから階段を登りきった高台に立派な社殿があります。　それは本(奥)殿も大きい変わった権現造のものです。　境内にはいろいろな石碑が林立していますが、その建立者や寄進者に６家族の名が連なっています。　神主さんの常駐するような大きな社ではないものの鎮守社としてよく整備されています。　夕刻も迫っていたので再訪を期して女坂を下って辞しました。



2．黒砂将門落人武者伝説

2-1. 黒砂の由来と将門伝説

黒砂について調べるとまず目に入ってきたのが『黒砂 いま むかし』(黒砂の資料を保存する会作成)の冊子です。 何から調べたら良いか皆目見当がつかないまま稲毛図書館に飛び込んで、目に入ったのがこの冊子だったのです。 最初に目に入ったというか、それしか見当たらなかったと言うことであったかも知れません。 ここで見つけられなかったら、黒砂公民館に行こうと思っていたのですが、その日は時間も無く、この冊子１本に絞り、貸出しはされてなかったので主要と思われる頁をコピーしました。 後日黒砂公民館でも当冊子を拝見しました。 公民館にはそれ以外の黒砂の資料もありましたが、将門伝説については見つけるところまで至っていません。 とにかく将門伝説については当冊子を当たってみても次の資料しか見当たりません。

伝説の伝来経緯を推測すると、昔から代々伝わってきた言伝え「将門落武者六人が黒砂に逃れて来て、隠れ住み着いた。 その後守り神社を創建して将門を祀った。」と言うようなことが江戸時代になって文章化されたようである。 江戸時代の後半の火災で多くの資料が失われたらしい。その後に書残された文書・資料も昭和 48 年の火事で焼失されてしまった。 平成 17 年になって「黒砂の資料を保存する会」によって資料の収集を計り、無くなった資料の記憶口伝を高橋辰之さんらが中心に行なった。ここに添付した「言い伝えられて来た「黒砂」の由来」なども高橋さんの記憶を文章化したものである。 落武者については現状ではこれだけであるが、言伝

言い伝えられて来た「黒砂」の由来

高橋 辰之

将門の乱終結

将門は、関東での統治者であった。

天慶三年(西暦９４０年)2月13日、領地が広く配下の武士が多くなり、経済面の更なる充実を図るため、配下の兵を故郷に帰農せしめたことから、平素は将門の身辺を守っていた４０００余の兵士もわずかに４００余の兵士になっていた隙をねらわれ、従兄弟の平貞盛と下野国押領使の藤原秀郷の４００余の兵に攻撃されて、本拠地である下総の猿島郡で最後の決戦を行い、このとき将門は流れ矢に当たり戦死する。

将門の戦死の知らせは、同年12月25日、京にもたらされ、翌年天慶4年44月25日、秀郷により将門の首が京に届けられて、東市に梟首された。これにより、将門の乱は終結したのである。

佐倉の臼井より逃れた6人の落ち武者

天慶の乱(天慶3年2月13日)の折、平将門の部下の武士たちで、佐倉の臼井で出城を守っていた者も同時に攻め滅ぼされる。

その折、佐倉より黒砂の地に通じる『佐倉往還』と言われる道を辿り、6人の落ち武者が黒砂の地に住みついたといわれている。6人の落ち武者の名前は左記の人たちである。

中山市郎左ヱ門隼人守・高橋八郎左ヱ門・渡辺久左ヱ門・遠藤源左ヱ門・山本清左ヱ門・春山与平(春山市兵衛)むこう3軒両隣と言われている。

黒砂の地形は、南北に小高い土手を背負い、すぐ目の前には海(東京湾)があり、魚介類も採れ隠棲するのに絶好の場所であった。

中山市郎左ヱ門隼人守

中山市郎左ヱ門隼人守は言い伝えられている推定によれば、９０００石の禄高を有していた身分の高い武士であった。

９０００石の禄高を現在の価格において考えてみると、市販されている白米5キロ詰めが２５００円、1斗が15キロで７５００円、1石で７５０００円。９０００石は実に6億７５００万円となり、禄高のすばらしさがわかる。

えとして1千年以上生きながらえてきたものである。 村の由来(か伝説)として、言伝えを整理・文書化されたのは江戸時代になってからであろう。 名前や石高で示された俸禄や佐倉往還などから江戸期の様子が窺える。 その後の火災などでそれらの資料が焼失されたという。 その後に残った言伝えでは、過去に遡るものがもっと有ったのかどうかは窺い知れない。

この状況ではやはり伝説と言うしかないが、千年以上の空白の先に「落武者」の真実があったとしても不思議ではない。「古代東海道」が黒砂の地を通っていたかとともに「黒砂将門伝説」を考える探索に踏み出してみることにする。

ここにおいては、940年(天慶3年2月14日以降に)に追討軍が何故臼井の出城を攻め、破れた六人の落武者達が何故この地黒砂に逃れられたのか。 そんな背景を探ることで、落武者存在説の可能性を見出すしか私には方法はない。 そこで平将門の乱の討伐前後を調べて見よう。

2-2. 平将門の乱

平将門の乱については、皆様方もよくご存じなので、詳細の話は省きます。 将門の乱は前半と後半に分けられます。

前半(931～938年)は一族の争いです。一族とは桓武平氏(坂東平氏)の事ですが、都から上総介(上総国の長官)として下向していた平高望(桓武三孫王高望王臣下)は任期後関東に土着し、子供達を関東各地の豪族に婚姻させて、関東で一大勢力を作る。 将門は高望の三男と言われる良将(持)の嫡男であった。 父・良将は若くして亡くなり幼い将門に代って伯父が土地財産を管理していたらしい。 青年期に都勤め(藤原忠平に奉公)をした将門が帰国してみるとその土地・財産が伯父たちに盗られてしまっていたのである。 朝廷に訴訟もしたが、埒のあかないうちに争いとなり、伯父・国香やその姻戚関係の一族(嵯峨源氏の流れで常陸国府の大掾の源護一族)の数人を戦死させてしまった。その後伯父・良兼等との幾度の戦いを経て、一族の争いは結局将門の勝利の内に終った。

後半は将門が地域の私的な調停役(江戸時代のヤクザの親分かのような)を重ねる内に、いつの間にかに国衙を次々と襲い、関東全域を手中に納めてしまい、ついには新皇と名乗り、国への反逆者として都からの追討軍と戦う羽目になってしまった939～940年のことである。 この追討軍とは別に関東では「褒賞と官位」をねらっての各地の武将や前半戦の将門に敗れた一族が将門を倒そうと動いていた。

[将門の最期]

940年(天慶3年2月14日) 将門が殺した国香の子・平貞盛(将門とは従兄弟)が率いる常陸の一軍は下野国の追捕使となった藤原秀郷等と2千とも3千人(騎)とも云われる連合軍を組み、平将門に挑戦してきたのである。 この時期将門軍は兵士の多くを帰農させており、手薄であった。 追討軍到着までには兵を揃えるはずだったのであろうが、その前に手薄な事を知っている貞盛が秀郷と組んで将門の根拠地を襲ったのである。 当初風上に立って少ない兵をもって、貞盛・秀郷軍を追い払ったものの、風向きが変わり、一気に形勢逆転されたらしい。 陣地に逃走しようと馬を一瞬止めたとき、流れ矢とも、貞盛の放った矢とも云われるが、将門の眉間に命中し、落馬。 そこを秀郷に首を落とされたとも伝わる。

首領を殺された将門軍及び将門政府は木っ端みじんに壊滅してしまった。 しかし新皇として関東を束ねようとした将門は各地の国府の長官に兄弟や取巻きを配置していたので、彼らの動向がその後の焦点となる。 都からの追討軍はその日(14日)はまだ駿河国にあったという。

[追討軍の到着]

将門や興世王が常陸国衙を襲った(11月21日)との知らせが都に伝えられたのは、天慶2年12月12日のことであった(『日本略記』) 27日には、下総国豊田郡の「武夫」が将門と興世王を奉じて謀反し、東国を虜掠したと信濃国よりもたらされ、宮中は大騒ぎになった(『本朝世紀』)。

明けて天慶 3 年正月元日、宮中行事が取止めになる一方で、将門、純友に対して東海・東山・山陽道に追捕使が任命された(『日本紀略』)。

正月 11 日に、将門追討の太政官符が東海・東山道諸国に下された(『日本紀略』)。　その官府が『本朝文粋』巻二に掲載されているが、そこに「官軍・黠虜(かつりょ・東国人や蝦夷)」に憂国の士を募り、その見返りとして、「魁師(かいすい)を殺さば、募るに朱紫(しゅし)の品(五位以上)を以てし、賜ふに田地の賞(功田)を以てし、永く子孫に及ぼし、之を不朽に伝へん。　また次将を斬らば、其の勲功に随ひて、官爵を賜ふ」という。

この五位という貴族の懸賞付追討令の効果は絶大で、将門討伐の気運が一気に高まった。

ついで正月14日には、坂東八国の掾が押領使兼務で任命された(『貞信公記』)。
彼らの中に常陸掾平貞盛、下野掾藤原秀郷、相模掾橘遠保(翌年藤原純友を討つ)、上総掾平公雅(将門の伯父・義父良兼の子)、下総権少掾平公連(きみつら・公雅の弟)がいる。

正月 19 日に参議藤原忠文が右衛門督に任じられて征東大将軍になり、2 月 8 日(※8 日は他本から追記)になってから東国にと向ったが、この征討軍(追討軍)の五人の副将軍の中には源経基や平良兼の子公雅、安房国平群郡大領家の平群清幹(平清幹)がいた(『扶桑略記』)。

表23　平将門追討の論功行賞の例

氏名	戦乱前	征東・戦闘	勲功・賞	備考
藤原忠文	正四位下・参議	征東大将軍	正四位下・参議	将門との合戦に遅れる
藤原為憲		常陸で将門と合戦	兵庫権少允	工藤氏始祖
藤原国幹	右京亮	征東副将軍・相模介	上総介	父は兼三
藤原秀郷	下野掾	将門を討つ	従四位下・下野守	奥州藤原氏始祖
平　貞盛	常陸掾	将門を討つ	従五位上・右馬助	伊勢平氏始祖
源　経基	武蔵介	征東副将軍	大宰少弐	清和源氏始祖
平　公雅	上総掾	押領使、興世王を討つ	安房守	尾張長田氏始祖
平　公連	下野権少掾	押領使、下総掾		公雅の弟
平　清幹	大監物	征東副将軍・上野介	因幡守	安房安西氏始祖
橘　遠保		押領使、遠江掾	美濃介	純友を討つ
橘　是茂	相模権介	押領使、	駿河守	最茂とも
橘　近保		押領使、駿河掾	駿河掾	遠保の兄弟か
藤原惟条	上野権介	押領使		秩父牧別当
小野諸興	武蔵権介	押領使		小野牧別当・武蔵小野氏

(「『古代の東国3覚醒する関東』荒井秀規著　吉川弘文館」の 224、225 頁から抜粋)

※この軍勢は、参議修理大夫兼右衛門督の宇治民部卿藤原忠平を征討大将軍として、以下刑部大輔藤原忠舒(ただのぶ・忠平の弟)や右京亮藤原国幹、大監物平清基、散位源成国、源経基らを副将軍となし、さらに下総権少掾平公連、藤原遠方らが同じくこれに従っており、坂東へ向ったのである(『扶桑略記』)。　(『将門と忠常』千野原靖方・著崙書房から抜粋)

[将門軍残党討伐]

平将門は、藤原忠文率いる官軍が到着する前に、平貞盛や藤原秀郷によって討たれた。　その知らせは、平良文が関与したとされる 2 月 22 日の信濃国からの報告を始めとして、29 日には遠江・駿河・甲斐国からの飛駅で都に届いた。(『貞信公記』ほか。これらの報告では将門敗死は 13 日と記されている。)

その後、興世王が上総国で、弟の将武が甲斐国で、同じく弟の将頼と藤原玄茂が相模国で、藤原玄明が常陸国で、忠文ほかに討たれたが、その場が広範なことから将門勢力が東国全体に及んでいたことがよくわかる。(「『古代の東国3覚醒する関東』荒井秀規著　吉川弘文館」から抜粋) 坂東八国と伊豆国の印鑑をすべて奪ったうえで相模国から上野国に戻った将門は、上野国府で坂東八国の国司の除目を行なうとともに、その王城を下総国に建て文武百官を任じ、内印・外印を定めたと『将門記』にはある。　王城建設、百官任官などは潤色であるが、坂東八国の国司除目は実際に行なわれ、各員はその任国に赴いたようである。　下野守平将頼、相模守平將文、伊豆守平将武、下総守平将

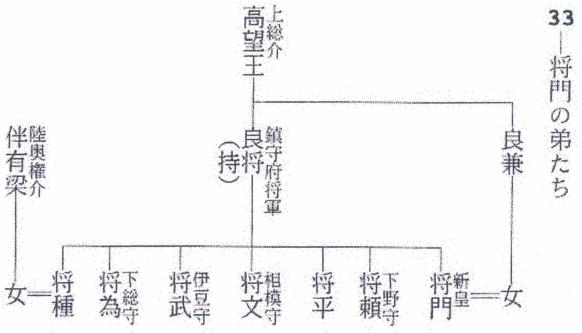
下野守　平将頼(将門の弟)
上野守　多治経明(常羽御厩別当)
常陸介　藤原玄茂(常陸掾)
上総介　興世王(武蔵権守)
安房守　文室好立(将門の上兵)
相模守　平将文(将門の弟)
伊豆守　平将武(将門の弟)
下総守　平将為(将門の弟)

為の四名が将門の弟で、そのほか上野守が多治経明(常羽御厨別当)、常陸介が藤原玄茂(常陸掾)、上総介が興世王(武蔵権守)、安房守が文室好立(将門の上兵)、武蔵守は『将門記』には見えない。

(「『古代の東国3覚醒する関東』荒井秀規著 吉川弘文館」の220頁から抜粋)

京都を出た追討軍の征東大将軍藤原忠文らは、将門の死んだ2月14日にはまだ駿河国にいた。このあと征東軍は相模国へ進出して、将門の弟(兄とも)平将頼及び藤原玄茂らを打ち殺している(『将門記』、『今昔物語』)。　反乱政権の新国司任命により、将頼は下野守、藤原玄茂は常陸介となっていたが、将門討死後、この二人はそれぞれの国へ戻らず、脱出して相模国に逃れていたのかも知れない。それとも、征東軍を迎え撃とうとして相模にいたのであろうか。

征討軍は将門与党の捜索を続け、興世王を上総国で誅伐し、坂上遂高(かつたか)・藤原玄明らを常陸国で斬っている。　また、さる正月11日に東海・東山道諸国へ発せられた太政官符は、すでに坂東の国々四方に知れ渡っていたので、その他の謀反の輩も探し出されて討たれたが、将門の弟7，8人は、あるいは髪を剃りて深き山に入り、あるいは妻子を棄てて山野を迷い歩き、追求の目を逃れた。



なお、将武はこのあと甲斐国で殺害されている。

3月18日、征東大将軍藤原忠文からの解状解文が京都に届き、上総国において興世王が平公雅の手によって討ち取られた旨が報告された。　3月25日には、上総介藤原滋茂(しげもち)が、将門の乱の折に、印鑑を奪われたとして職を停止されている(『貞信公記』、『日本紀略』)。

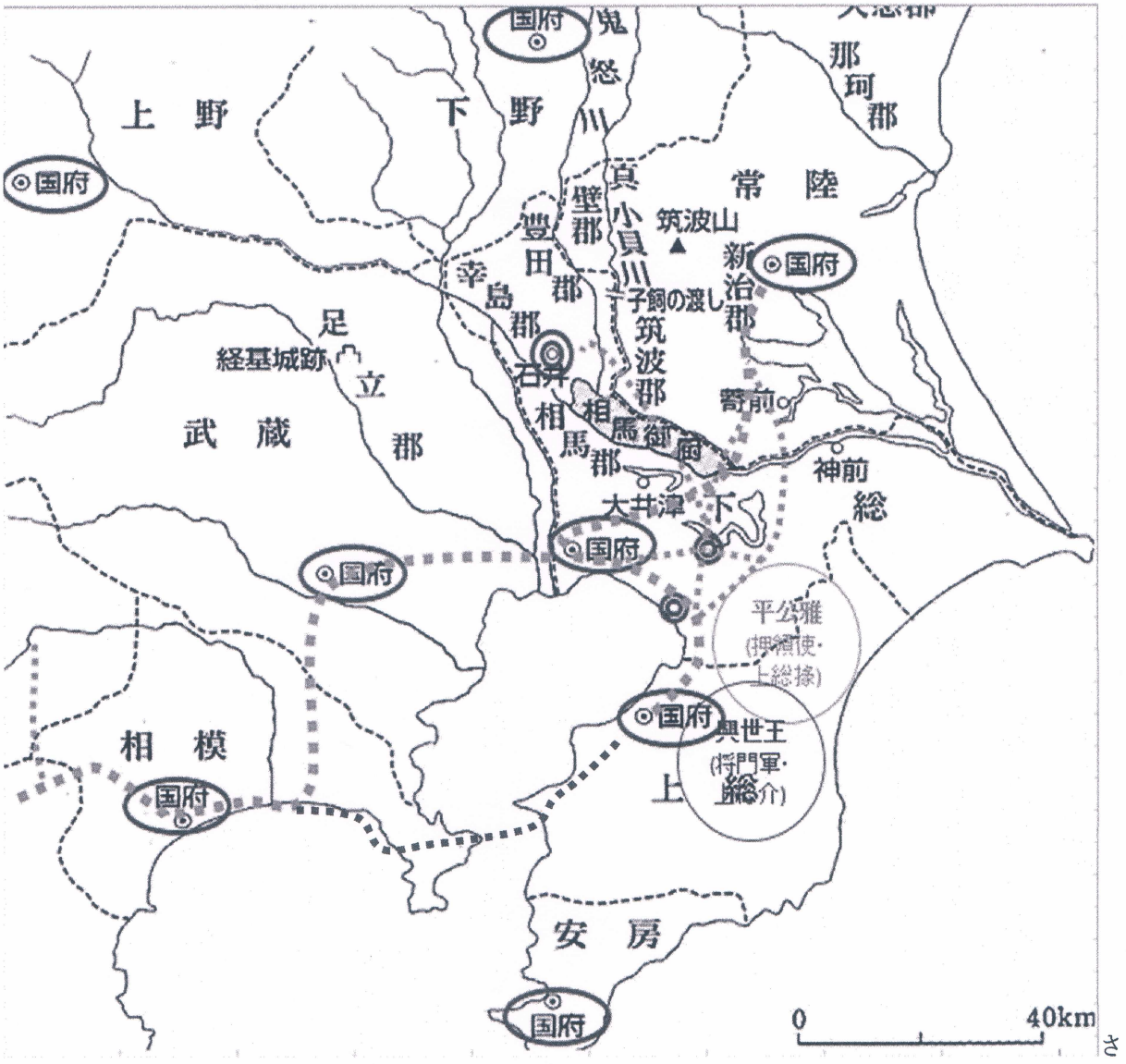
次いで、4月8日、征東副将軍の藤原忠舒及び下総権少掾平公連が、押領使として下総国に入部し、謀反の党類を尋ね捜し出してこれを討った(『将門記』)。

こうして5月15日には、坂東の乱を鎮圧して任務を終えた征東大将軍藤原忠文が、漸う帰洛し、節刀を返上したのである。　(『将門と忠常』千野原靖方・著崙書房68頁～71頁から抜粋)

2-3. 臼井の出城も落とされる

さて、将門の倒れた後の追討軍の動きを知る資料は先に示した程度しか手元にはない。この臼井の出城を襲撃したのは、追討軍なのか、地元の武闘集団なのか。　それを明かしてくれる資料はない。　そもそも臼井の出城が存在したのかも明確ではない。　それが存在したとして話を進めるしかない。　その場合、如何してそこに立て籠もる必要があったのか。　どんな人々が出城に集まったのか。

推理を進める前に、将門の動きと追討軍の動きの概略を地図で見てみよう。　2月15～16日頃相模国に入り、そこで本体は将門の弟(兄とも)平将頼(反乱軍下野守)や(反乱軍)上野守の多治経明(常羽御厨別当)、(同)常陸介の藤原玄茂(常陸掾)を討ったのであろう。　その後(併行してか)、別働隊として、一つは甲斐国で(御殿場辺りで別れてか)平将武(反乱軍伊豆守)討ち、もう一つは平公雅(上総掾・押領使且つ副将軍？) 率いる上総軍で、将門の副将・興世王(武蔵権守、反乱軍上総介)の誅伐を目的に、上総に向った。　平公雅らは追討軍本体と相模国で分かれ、武蔵、下総国を経て上総国に至ったのか、相模から渡航して上総・木更津を経て市原に至ったのか、それとも上総近郊に身を伏せていて、時を見計って、興世王を襲撃したのか、私には読み切れていない。　ともかく、公雅は2月19日※1に興世王を誅伐した。　次将を討ったことで爵位恩賞に与り、安房守になっている。公雅は上総掾として上総国府を立直し、安房国の奪回も果たしたのであろう。　その後安房守として補任され、天慶5年(942年)には藤原秀郷の後任として武蔵守に補任されている。



追討軍本体は相模国から武蔵、下総国を通り、常陸国へ入ったのだろうか。

常陸で坂上遂立(かったつ)や藤原玄明らが追討軍に斬られたとなっているが、これは将門を打ち破った平貞盛(常陸掾・押領使)らの軍によってであろう(貞盛・秀郷らも押領使に任ぜられているので、地元からの追討軍と言える)。　この討たれた二人は将門最期の戦い時に後陣で指揮をしていて、先に貞盛・秀郷連合軍に敗れ、逃げ隠れしていたのであろう。　追討軍本体は相模国に踏み止まっていたと思われる。　上野・下野国は藤原秀郷、常陸は平貞盛らに任せていたのであろう。　上総・安房国も平公雅に任していたのかも知れない。　将門政権を担ったものの多くは討たれてしまったが、将門の弟達(相模国、甲斐国で斬られた将頼や将武を除いて)の多くは逃延びていた。　そこで先に述べた「4月8日、征東副将軍の藤原忠舒及び下総権少掾平公連が、押領使として下総国に入部し、謀反の党類を尋ね捜し出してこれを討った(『将門記』)。」ように、将門の本拠であった下総国については特別に残党捜索を続けたのである。　しかし將文(反乱軍相模守)、將為(まさなり・同下総守)についてはその後名前が挙がってこなかった。

※1 同年2月14日に平貞盛・藤原秀郷らとの合戦で将門が討ち死にすると、将門の勢力は一気に瓦解して首謀者は次々と討たれ、興世王も2月19日上総で平公雅に討たれた。(Wikipediaより抜粋)

[臼井出城の価値]

臼井にも将門軍の本拠を守る砦があったらしい。現在臼井には城跡と言われるところが沢山ある。有名な臼井城跡とそれを取巻く支城や砦で、その多くは戦国時代に築城されたものである。　臼井城も将門とも関連する両総平氏の臼井氏の築城と言われるものの、当初(1100 年前後)の臼井氏の城は

光勝寺のある台地と言われ、その後の築城である。　将門軍の築城したであろう出城というのは臼井氏出現より150年ほど昔の話である。　今残る城跡のどれかに当たるのか、また別のところにあったのか、手がかりになるものは得ていない。

この臼井の地は将門にとってどのような位置を占めるかと考えると、地理的には将門の本拠(石井周辺)や領した地域(豊田・幸島・相馬・印旛郡)の南端に当り、下総国の市河(大野城など)、松戸・流山(北小金城など)とともに古代東海道に沿った防衛ラインをなしていたのではないか。　この地域には中世、特に戦国時代に沢山の城が築かれたが、その中で将門の時代に築造されたという言伝えが残っているものも多くある。　古代東海道や佐倉道のような東西の道と伴に、南北に通じる重要な道の一つとして、臼井道(相馬～印波・臼井～千葉)があるが,その交点の地に王城を守る出城が築造されていて当然なことであったと思われる。　この臼井の出城に加えて、その東にある佐倉には、戦国時代の本佐倉城や江戸時代の佐倉城(戦国後期には鹿島城)があるが、これらもその昔から出城や砦とされていたのかも知れない。　これら臼井・佐倉ラインは常陸南部や上総方面からの防御戦でもあった。

将門を倒すために京都から招いたと云われる神護寺の不動明王像が成田に鎮座したことを考えてみると、将門の勢力範囲がその地に及んでいなかったことがわかる。　九十九里浜に上陸し、栗山川を遡って、多古などを通り成田に祀られたのである。　下総東部や上総北東部及び常陸南部について言えば、上総国一宮に住む平良兼(公雅の父、将門の伯父)が将門と戦うために常陸に赴く時に使うルートがこの地域であった。　成田周辺は平貞盛らの常陸勢力の最西南端に位置し、将門勢力下の酒々井・佐倉・臼井地域と相対していたのだ。　そういう意味でも出城としても重要な位置にあったのだと思われる。

ただ問題点もある。　将門が常陸国衙を陥れたのが天慶2年(939年)11月21日のことである。将門の側近となっていた興世王から「案内ヲ検スルニ、一國ヲ討テリト雖モ公ノ責メ輕カラジ。同ジク坂東ヲ虜掠シテ、暫ク氣色ヲ聞カム」と東国制覇を勧められ、その後下野・上野の国衙を占領し、その他の国府からも印綬や鍵などを奪い、国守を追放して、新皇を名乗り、政権を発足させたのが天慶2年(940年)12月19日で、将門の敗死が2月14日である。この2ヶ月程の間に王城建設(これは計画だけ)とその周辺の防備施設、東海道、東山道の防御施設などが何処まで手をつけられたのかは疑問である。　尤もその以前に、伯・叔父や貞盛ら一族との戦いの中で下総国の勢力範囲には適当な城や砦を設けていたとも考えられる。　市河の大野城跡は将門の築造と伝えられているが、臼井の出城も将門の領地構想※の一部であったかもしれない。

※ここでいう領地とは関東全域を目指す前の,豊田・幸島・相馬・印旛郡等下総北西部のこと

[この出城を守ったのはどんな人達なのか]

①将門の王城の南方面を守る武隊の兵士として、地の利を知る印旛沼周辺を中心に下総の南部、西部の人達だったのではないか。

②将門軍崩壊後逃延びた兵士の一部ではないか。

春を迎えて、招集した兵士の多くを帰農させ、将門の周りに残った1千余りの兵士は将門近習か、将門本拠(石井)近くの人達であった可能性が大である。

[この出城を攻めたのはどんな武隊なのか]

①地元もしくは常陸の平貞盛に属する武装集団

②平公雅が上総国にいた興世王を討伐した後、当地も襲撃した。

③追討軍が常陸国に向う途中(還り)に下総の要所を襲撃した。

④4月8日以降に、「征東副将軍の藤原忠舒及び下総権少掾平公連が、押領使として下総国に入部し、謀反の党類を尋ね捜し出してこれを討った(『将門記』)。」とされる平公連ら追討軍

等が考えられるが、次の理由「①の平貞盛らや②の平公雅は常陸、上総の掾としての役目と押領使としては他国までに手を出す状況ではない。　③の追討軍本体は相模・武蔵国に留まっていたと考えるのが自然である。　そこで、①の近郊の反将門に属する武装集団による残党狩りと、④の下総権少掾・押領使平公連らによる捜査によってあぶり出され襲撃された可能性が大であると思う。

④の平公連は公雅の弟で、平兼良の子である。　公雅・公連兄弟は父・良兼について将門と戦っていたが、良兼の死(938 年・天慶 2 年 6 月)以後、貞盛らとは袂を分けて、中立的な立場であった。元々将門には同情的なところもあったようだ。　彼らはその後、都の軍事貴族となり、その子孫も通じて、坂東に根を下ろした良文流の子孫(頼忠・忠常・常将ら)との関係は良く、それに対して貞盛・重盛流とは敵対関係をなしていくのである。

将門の弟達・将文(反乱軍相模守)、将為(まさなり同下総守)の捜索を中心に下総の残党狩を担った公連であるが、結局将門の弟達を捕まえることは出来なかったようだ。　公連の冠位・官職がそれ以上のものとして記録されていないことから将門の兄弟を捉えられなかったのだろう。　それとも敢えて見逃したと考えられないだろうか。

この④場合、将門の死 2 月 14 日から平公連らの下総入府の 4 月 8 日までに 50 日以上の日が経ている。　元々その出城を守っていたとすると、将門死の報を得たのが何時か分からないが、臼井の出城での籠城が長過ぎる様に思える。　戦場から脱出し、貞盛軍らの追討を逃れて、やっと臼井の出城に潜り込んで様子を窺っていたところ、公連らの追討軍に攻め込まれてしまったと言える。

①の近郊の武装集団による残党狩りであった場合、臼井の出城の守備隊であろうが、戦場からの落武者であろうが、残党狩りは行い得る状態だったと思われる。　この地元の武装集団が出城を襲撃した場合には、地勢をよく知り尽くしていて、逃亡者の道は閉ざされていたのではないか。

そういうことを考えると、④の平公連ら追討軍が、戦場(石井付近)から逃延びてきた落人集団が臼井の出城に籠城するのを聞き付け、襲撃に及んだと考えるのが妥当と思われる。　そこで、出城を脱出し、南方に逃延びたのが伝説の六人の落人だったという筋書きは如何なものだろうか。

2-4. 落武者逃走劇

[南方に逃亡したのは]

①他方に較べ手薄であった。

出城からの脱出を方位で考えると、北方の印旛沼に舟で出て、香取海への脱出が考えられるが、舟が確保されていなければどうにもならない。　また香取海周辺を平貞盛らに押さえられていたら、その先への脱出も難しいと考えられる。　東方の佐倉・成田方面も反将門勢力が強いところである。　西方は追討軍の目が光っている。　取敢えずは南方面にしか進めることが出来なかったのであろう。

②縁故地があった。

元々この臼井の出城を守っていた人々であったならば、黒砂を含めて千葉界隈の人達もいたのかも知れない。　しかし将門周辺にいた兵士の落人ならば、その可能性は低いと言える。

③下総国衙を目指したのか

臼井の出城にいた人達にどれほどの情報がもたらされていたかは分からないが、都からの追討軍の到着を知らされておれば、国衙を押さえた仲間(上総国の興世王、下総国の平将為)を頼ることは難しい。然も西方下総国衙方面からの襲撃のようであり、下総国衙は落ちてしまったと思ったであろう。④上総国衙を目指したかその内に上総国衙も落とされるだろうから、南下しても千葉止まりということで、彼らの逃走劇は始まったのであろう。

[黒砂に到達したルートは？] （別紙地図を参照）

出城が落城して辛くも脱出した場合は馬の調達などは出来なかったかもしれない。 早めに脱出して、確保しておいた馬を得られたとしても、突っ走れるのは5～10ｋｍ??程だろう。追っ手から逃延びて、臼井道を全速力で南下して10～15ｋｍで馬を手放し、後は徒歩で進んでいったのであろう。

馬を棄てると後は、谷筋に下り、人家を避け、水を求めて川筋に沿って歩いたのであろう。
地図を眺めてみると、臼井道を南下して10ｋｍ程のところで佐倉方面からの道と合流して四街道の中心に入る。 この四街道辺りが東京湾と印旛沼の分水嶺にあたる。 山というようなものがないこの地域でも、台地上には高低が少し有り、水は低い方に流れる。この地域では御成街道近くに分水嶺を見いだせる。 距離にして臼井から12ｋｍほどである。そこから少し南下して都賀の西方あたりで坂を下り、モノレールを潜って、再び坂を上ると原町、高品と続いて佐倉街道(国道 51 号線)に合流して、千葉街中に至る。 この道は中世・近世を通して重要な道で裏佐倉道と呼ばれていた。

話は少し前に戻るが、この都賀西方の坂道を右手(西方)に下れば、葭川(東寺山)の上流域の谷間に入る。 西側の崖上に殿山ガーデンのある高台となる。この川筋は両側を高台に挟まれ、うっそうとした窪地で隠れ家にはもってこいと思われるが、彼らはさらに川を下っていったのだろう。葭川は高品の台地を南東見て南西に下る。 そこで、園生と源町の間の谷間(動物公園の西側)から流れ出る葭川本流と合流して、さらに南下して千葉市街に入る。 彼らもその葭川に沿って千葉に入り、「いけたの池」と「結城浦」を結ぶ都川・葭川合流の大きな川に直面したのであろう。 川は舟がないと渡れなかっただろう。 ここで彼らは自分らの行動位置を確かめられたのではないか。
川向は「河曲駅」と馬牧が拡がっていたのかもしれない。 千葉郷やその先の上総国方面に行くつもりではないので、Ｕターンして葭川を遡ることにしたのだろう。 川岸をもう少し西に行って、東海道の川渡り場(都川・葭川合流)から東海道を西北に進むと、黒砂に着くのであるが、それでは黒砂に何らかの当てがあっての話になる。 今回の探索では、そんな当てなどなかったとして、黒砂は頭になかったと思う。 そこで葭川を遡り、合流点まで戻り、都賀から彼らの通った川とは別の葭川本流側を進み出した。 作草部辺りで葭川本流からそれて西の谷間(穴川と千草台の間)を進み台地の峯、穴川にたどり着いた。 この穴川から西に辿れば稲毛であり、南東に辿れば千葉市街である。その道は江戸時代には房総往還と呼ばれる街道の一部で現在でもこの地域の主要道路である。この２つの道路と海岸で囲まれた三角形の台地の中に穴川から黒砂に至る小さな谷間があるのをご存じかな。 小中台と稲毛区役所・京葉工業高校・放射研に挟まれた谷間の公園がある。
昔はため池もあったそうで、周辺の台地から集まった水がひらめ川という小川となって黒砂で海に注いでいた。 現在は埋設管となって姿はない。 江戸時代この谷間を中心に水田が耕作され50～60石の米が生産されていたという。 古代はその谷間を木々が埋め尽くしていたことだろう。彼らはこの谷間に踏み込んでいったのだろう。 曲がりくねりながら小川に沿って下っていくと、突如大きな道(古代東海道)に出くわし、驚いて後ずさりしようと思ったが、前方に海がはっきり見えだした。 辺りには旅人相手の茶店のようなものがあるだけで、人家もまばらである。 日も暮れかかり人気もなかったので、思い切って大道を横切って、海岸に出てみた。 両側が切り立った崖とその下に僅かな砂浜が長く続いていた。 この海岸に立ってみて自分たちの居場所がほぼ理解できた。 海に出てしまっては、これ以上前には進めない。 東海道の通るこの地に留まれないから、再び来た道を。戻るしかない。 黒砂の谷間深くに戻り、一夜過ごした。

2-5. 黒砂の落武者

[何故黒砂に留まったか]

皆の考えは案外早くまとまった。 海に近いのも悪くない。魚や貝を捕れば食料には困らないだろう。

谷間には平地も有り、水がある。 開墾できそうだ。 問題は村人が迎え入れてくれるかどうかだ。村人に恐れられたりして、国府に訴えられる危険はある。 これ以上逃げ回っても仕方がない。 刀を棄てて農民に戻ろう。 武器や武具の鉄を溶かして鋤鍬を造ろう。 村人との接触は農民らしくなってからだ。 自分らは若いので、農業を手伝える。 開墾に従事して、村の人々の手助けもできる、そんな姿を見せられれば、村人も信用して付合ってくれるだろう。

[黒砂は落人を受容れられる地だった]

4 月も半ばを過ぎ(現在では5月末だったであろう)、田植えも終る時期だったが、籾を得られれば苗を育てて、植えられるように、僅かな平地を開墾して田を作り出した。 出城からの脱出時に携えた食料も尽きてしまう。 夜間の狩猟・漁業（縄文人並に）だけでは、耐えられない。 早く住民と接触して、拾い集めた薪などで食料と交換して貰う必要がある。

思い切って村人に会うことにした。 集めた薪を携え、村人を怖がらせない様に近づき、穀物との交換を申し出た。 少し打ち解けたところで、自分たちの身元を明らかにして、自分たちが村の労働力にならないかと持ちかけたのである。 幸、この周辺の人々は将門のことはよくは知らないようだが、少なくとも悪くは思っていなかったようだ。 六人の落ち武者はすでに農民の姿に変っていただけでなく、その心持ちも農民そのものになっていたのだろう。 そんな彼らを村人は快く受容れていった。

[黒砂に落着いて]

彼らは農民として、漁師として、時には猟師として懸命に働いた。 村人に受容れられたが、しばらくは黒砂の奥の谷間に住いし、東海道の通りからは目立たぬ様に、耕作地を少しずつ開墾して拡げることにした。 また、高台と海岸との間に僅かな切れ込みや谷間がある。 そんな場所に船泊を造り、谷間に住居も設えたのであろう。 街道から目立たぬ海岸沿いの谷間は漁業の根拠地としては最適である。 万が一攻め込まれても、舟での脱出も可能である。

幸、残党狩りはこの地に及んでこなかったようだ。(※1)

※1：「(天慶3年)2月 16 日、(復官した)常陸介藤原維幾とともに常陸国府に入った交替使(詔使)によって、微罪の輩に対する符(公文書)が出された(『将門記』)。 これは地方に限って行なわれた曲赦(きょくしゃ)とみられる。 降参した者や各郷村に帰住した者らを赦免したのであろう。」

(『将門と忠常』著千野原靖方)引用

その後下総国などでも同じような措置を採られたのではないかと推察する。

[家族は黒砂村人か、落武者家族か]

彼ら六人はもちろん家族を連れての入植ではないわけだが、子孫が累々と残ったとすれば、家族を呼んだのか、その村や近隣の村で連れ合いを見つけたのであろう。 屈強な六人の若者は、家庭を持ち、田畑の開墾や漁業の推進に勤しんだのであろう。

現在、中山、高橋、渡辺、遠藤、山本、春山の 6 人の名が残されている。 名前の由来から彼らの出身地が分からないものかと思っていた。

[黒砂の人と偶然に] 最近の私の出来事ですが、大腸内視鏡検査で青葉病院に行き、そこで偶然にも黒砂の高橋さんと登戸の中山さんにお合いしました。 検査前の準備時間の最後になって黒砂や将門の話になったのですが、それぞれ検査室や更衣室に入り時切れとなってしまい、詳しい話(余り知らないとの事だが)は出来ずに終ってしまいました。 住いが分かれば手掛かりになる可能性も残っていそうなので、今後の展開を期待しているところです。 この件については、何らかの手掛かりを掴めれば別項で書きたいと思っています。 その中で一つ、登戸の中山さんは黒砂の伝説については知らないが、彼の出身が茨城の八千代町という。 この町は坂東市の北隣に有り、将門の本拠のあった石井(岩井、下総国で有ったが明治の廃藩置県後茨城県に属する)近くにある。 そして周辺には中山さんも多いらしい。 中山さんは将門の周辺に居た人かもしれない。

3. 中山殿に原氏が絡む?? 新たな黒砂伝説 !!

『黒砂いまむかし』といえば、もう一つ思わせぶりな文章が載せられている。 将門の家臣6人の内の一人とされ、その棟梁でもある中山氏の事が『千学集抜粋』※1に登場しているという。

「中山殿と申すは、原越後守胤房の末子胤宣中山八郎太郎といふ、後、出雲の守と申、子二人、長子胤タダ(忠)下野(守)といふ、次子胤義治部少輔、又云、胤宣の子胤次石見守、小中台に住す、・・・」(『千学集抜粋』より)

※1 『千学集抜粋』とは室町・戦国時代に、千葉氏や妙見信仰及び千葉妙見宮寺(現千葉神社)などについての記録が綴られた『千学集』の原本が火災で失われ、一部残っていた写本を『千学集抜粋』として編集したもの。

何故ここで原氏一族の中山殿と黒砂の中山氏が結び付いたのだろうか。 ここに登場する原胤房(?～1471年)は千葉氏の重臣で、後期原氏の3代目当主で、享徳の乱(※2)時に馬加(千葉)康胤(?～1457年)を誘って、千葉宗家の千葉介胤直(1413～1455年)を滅亡させた人物である。 その末子(八男)が中山(原)胤宣というのである。(14頁及び 別添の生実原氏の系図参照)

3-1. 原胤房末子中山胤宣とは

胤宣が中山氏を名乗るのは、中山という領地を得ていたか、あるいは中山家の養子になったからなのであろう。 また中山胤宣の息子の一人に胤次岩見守がいて、小中台城主であったともいう。これは気になる話ですね。

※2 享徳の乱(1455～1482年) 鎌倉公方足利成氏が関東管領上杉憲忠を鎌倉御所で惨殺したことに、上杉氏は報復の兵を挙げる。 武蔵国府跡近くの分配原で開戦。以後28年間関東各地で公方方と上杉方の戦闘が繰り広げられた。 戦国時代の始まりといわれる応仁の乱(1467～1477年)の12年前に関東では戦国時代に入ったと言われる戦争である。 成氏は鎌倉には戻れず、公方を指示する武将の多くがいる関東北東部の古河に館を構えた。 これにより古河公方と呼ばれるようになる。

そこで、中山という名字や地名について調べて見る。 中山という名字は、名前の辞典によると全国85位とあり、まアまアよくある名前といえるが、千葉県では少ないらしい。 それに対して茨城県には中山姓が多いらしい。(11頁「黒砂の人と偶然に」に茨城県の中山さんが登場)

地名も市川市の**中山**(中山法華経寺の所在地)に行き着くのと、四街道市の**中山城跡**にその名前が見られる程度という。

原胤房の話に戻ると、古河公方成氏方の原胤房は上杉氏方の千葉介胤直を倒した後は、将軍義政の意向を受けて関東に下向した東常縁(美濃東氏・千葉氏六党)率いる軍勢に敗れて千葉近郊から姿をくらませてしまった。 一方千葉宗家後裔の実胤・自胤兄弟(胤直の甥)が康胤・胤房の連合軍から逃れ、一時市河の豪族・曽谷氏とともに市河城(未確定・国府台城とも言われている)に籠城していたが、古河公方足利成氏の軍勢に攻められて落城(1456年(康正2年正月16日))。 兄弟らは武蔵国に逃込み上杉氏の援援護の元に赤塚城(板橋)・石浜城(浅草)を得て「武蔵千葉氏」として復活を期した。

市河城落城後、この市河の地は公方方になり、その一翼を担っていた原氏の進出があって胤房の弟・原光胤(?～1466年)が大野 原氏を興す。 大野郷の直ぐ南方が中山で胤房は息子の胤宣を中山に送り込んだのかもしれない。

もう一つの四街道の中山城跡について考えて見よう。 中山城跡は四街道の吉岡というところにある中世城郭跡である。 福星寺城館や木出城(吉岡城)とともに吉岡氏※3関連の城であったらしい。

※3 吉岡氏は臼井氏の一族と言われ、山梨氏、蕨(和良比)氏、中台氏、小名木氏らと伴に千葉庄山梨郷周辺を治めた豪族で、佐倉(本佐倉城)と千葉を結ぶ佐倉街道の守りを担っていたようである。

『浄光明寺文書』に鎌倉府に仕えた吉岡盛胤という名が残る。 1421年(応永28年12月11日)、鎌倉府の奉行人としての行動が記されている。

しかし、この辺りには中山という地名は見当たらない(戦国期の記録に留めているかは確かめていないが)。 従って、城主として中山氏が入ったので、中山城と呼ばれたのではないかと考えられる。その場合、中山氏と言うのは原胤房の息子の中山胤宜の後裔のことではないかと思われる。 それでは原胤宜の婿入りした(場合の)中山家とは何処の何者となるが、下総界隈にはざっと見渡したところ、それらしきものは見当たらない。

そんなことから、『黒砂いまむかし』の筆者の方達も、もしかしたらと目を付けられたのが『千学集抜粋』の中山殿ではなかったかと想像するのだが。

胤房が息子を中山家へ養子に出したのは何時の時点かは、はっきりしないが、黒砂・小中台と生実は千葉府中(城下町)に近いと言える位置関係から、千葉府中外郭の西部地域の守り固めとして稲毛地域の城塞化を試みたのではないのだろうか。 そういうストーリーを考えると、1455年(享徳の乱)以前に黒砂の中山家に胤宜の婿入りがあったと推測する。 享徳の乱の勃発でそんな胤房の構想も吹っ飛んでしまい、自らも千葉を離れ、千葉氏を継いだ岩橋(千葉)輔胤も千葉から平山に、更に佐倉へと本拠を移してしまった以上、黒砂の城塞化は宙に浮いてしまった。 本拠を佐倉に置いた千葉氏の防御線としては四街道付近が重要なところとなり、中山氏は吉岡氏と連合する形で中山城を築城したと考えられるのではないか。 それで黒砂の中山氏の主力が吉岡に移ってしまったのではなかろうか。

3-2. 市川の中山の隣接地・谷中郷高石神に「原宮内小輔胤義」現れる

えエッツ!! 「原胤義」が市河中山に!? 「胤義」とは前述の原胤房の末子胤宣(中山殿)の子息・中山胤義が想起される。 これは、参ったなァ!!

1431年(永享3年12月24日)の「原胤義売券」(『中山法華経寺文書Ⅰ』五五)には、「原宮内小輔胤義」なる人物が「下総国八幡庄谷中郷内高石神南方内田」を本妙寺に売却し、千葉介胤直がそれを証明したと記されている。 また1438年(永享10年3月16日)に日親※5が著した『折伏正義抄』の中に、高石神の観音堂の檀那・堂主が「原宮内小輔」と記している。 両者は同一人物・原宮内小輔胤義であろう。 中山の西隣にある高石神に領地を持つ原氏、まさか中山氏を名乗っては居ないだろうと思いながらも気になる一文である。 原氏と市河八幡荘、1336年下総国の動乱で八幡荘を陥れた千葉介貞胤は九州千葉氏系の胤貞後裔を九州に追っ払って千葉氏宗家のものとした。
九州系の家臣だった曽谷氏(曽谷氏は胤貞及び貞胤に娘達を嫁がせていた)は貞胤の家臣として残り、そこに円城寺氏や原氏(後期)もその地に領地を得ていたらしい。 そういう状況下であったから、原氏の一族がいても当然である。 ただ、大野原氏の本格的な入部は、1456年の市河合戦(多古から落延びて市河城に籠城した千葉実胤・自胤兄弟を擁して曽谷氏が中心に闘ったが落城し、曽谷氏は滅亡。 兄弟は武蔵国へ逃延び上杉氏の援助を得て武蔵千葉氏となる。) の結果、上杉派が居なくなった市河周辺に原光胤らが進出して大野原氏が成立する。 従って、それまでの市川周辺での原氏の活動は目立ってはいないし、原宗家・胤房周辺を含めて市河中山氏というような名前は出ていないと思う。

年代から見ると、この原宮内小輔と胤房末子の中山殿の子胤義とは少なくとも30歳は年が違うと思われるので同一人物ではあり得ない。

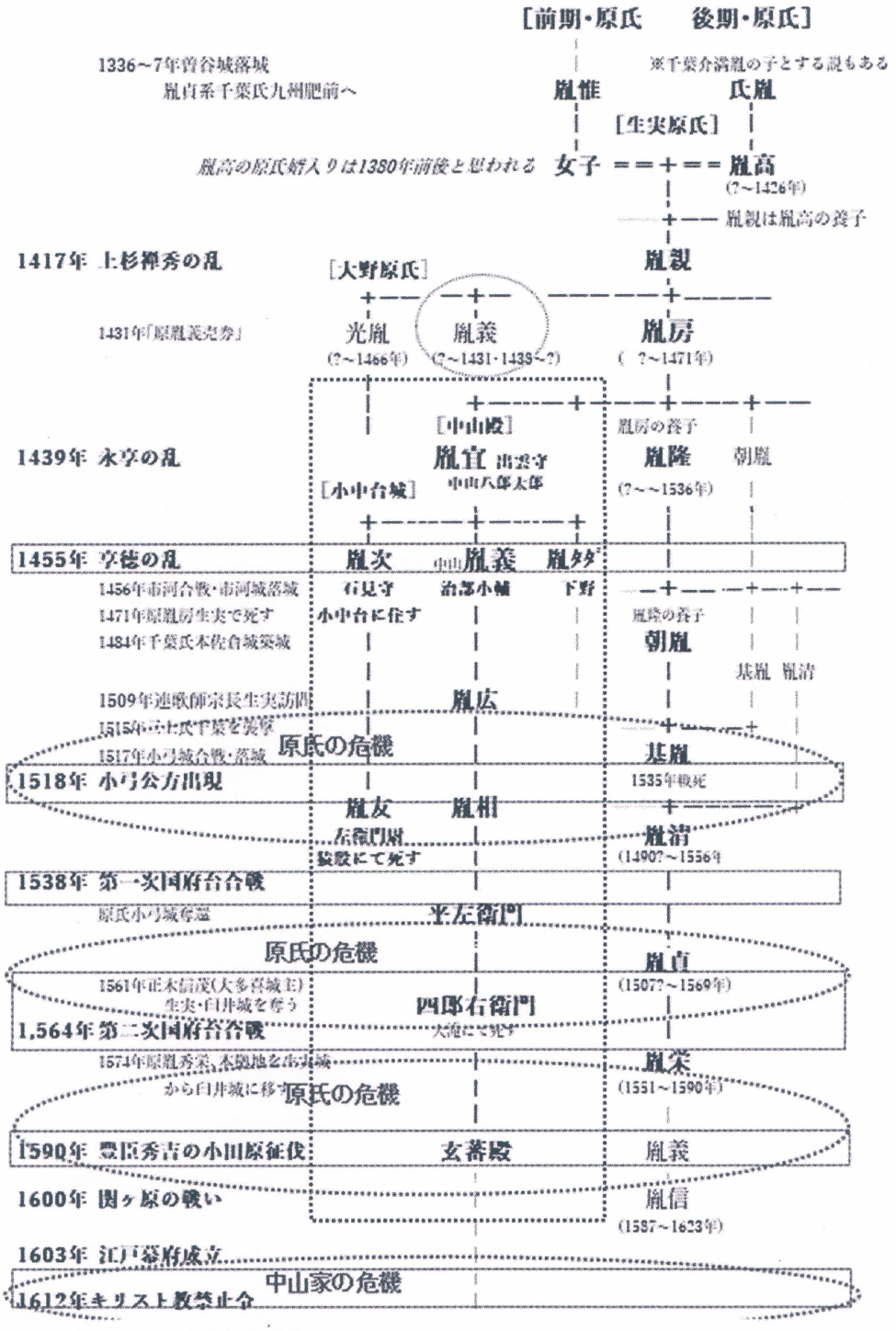
3-3. 『千学集抜粋』の中山殿

原胤房－胤宣中山八郎太郎－中山胤義の系図の流れを確認してみよう。
外山信司氏著の[下総小中台城について]の文中に「『千学集抜粋』にみる小中台」という項を設けられている。

【（前略）原胤房の末子である胤宣は中山八郎太郎といい、後に出雲守と称したが、その子胤次は石見守を称し、小中台に住んだことがわかる。　(中略)小中台地区の中世城郭としては、小中台城しか存在しないからである。　この記事は、小中台城が原一族の城であったことを示す点で重要である。　なお、ほぼ同じ内容は、近世に成立した『妙見実録千集記』の「中山系図」にも見ることができる。　(中略)原胤房の末子である胤宣は中山を名乗っているので、中山(市川市)を領したのであろう。　永禄3年(1431)12月24日付「原胤義売券」により、原氏が中山に隣接する高石神(市川市)を領していたことがわかる。(後略)】とされている。

市河の高石神を領した「原宮内小輔胤義」と「胤房―中山胤宣―中山胤義」は同名であっても同一人物ではないと先に述べておいた。　しかし、中山胤宣の養父が原宮内小輔ならば話は別である。原宮内小輔胤義と原胤房は同世代の人である。　原氏略系図の一つには(出典が不明)、胤房や大野原氏の光胤らとともに胤義が原氏2代親胤の子供として描かれている。　原宮内小輔胤義が原胤房の兄弟で、彼がその後中山氏を名乗っておれば、胤宣の中山家への養子が成立する。そして子供に養父の名前胤義を継がせるのである。　市河合戦後、大野原氏の進出を受けて、東寺山や吉岡に拠点を移したと考えられる。　名前の「中山八郎太郎」という「郎重ね」が気になる。　原宗家の末子八郎が中山宮内小輔胤義(男子に恵まれず)の養子になり中山家の太郎となり、八郎太郎が成立する。いやいや、今回は小中台も近い黒砂に焦点を合わせて考えているので、余計なことは考えないでおこう。

『千学集抜粋』による生実原氏と中山殿の系図



この系図は外山信司氏が『千学集抜粋』を引用して作成されたものに、筆者が年代・事件などを書き加えたものである。

3-4. 原氏系中山氏の名字改変

再び外山信司氏の『下総小中台城について』に戻ってみると、「千学集抜粋にみる小中台」の最後に中山氏の末葉についての話がある。 【(前略)小中台の原氏は断絶したようであるが、同系の子孫は小中台にほど近い東寺山(千葉市若葉区)に土着し、近世まで存続したという。『妙見実録千集記』には、「此内中山氏末葉牢人、東寺山住居ス、民家ニ降ル、時の地頭中山勘解由殿名字差障、一人ハ中嶋ト改、今一人ハ中沢ト改ムト云々、是中古ノ伝也」

やはり、原系中山氏は名前を変えざるを得なかったのだ。 小田原合戦で浪人し、農民に帰農した時たまたま地頭が中山氏であったため、名を変えたとあるが、「古の伝えなり」と意味深な終り方である。 名前を変えなければならない問題が孕んでいたと解釈したくなる。

3-5. 黒砂の中山氏の没落はあったのか

江戸時代以降の中山氏の黒砂での存在が他の5人に較べて薄いのは何故だろうと考えたときに、想像される一つが戦国末期から江戸初期に中山氏の没落があったのではないかと考える。

黒砂の中山氏(原胤房末子の胤宣の子孫)が東寺山や吉岡の中山城に入ったとする。 そこでの滅亡の危機は何度か考えられる。

①1517～8年の小弓公方・足利義明の出現で、原氏母体の生実城が落城して原氏が霧散してしまう。 1538年第一次国府台合戦で義明戦死、小弓公方解体。 原氏も生実城を奪還し勢力を戻す。

②1561年武田信玄が北条氏を攻め、小田原城を包囲。 北条方の原氏も小田原城に駆けつけている間に、里見氏方正木氏(大多喜城主)が下総を荒らし回り、生実城・臼井城も奪取されてしまう。 その後原氏は両城を奪還して再び勢力を戻す。

③最後の戦国末期(1590年)の豊臣秀吉による北条征伐での小田原合戦で原氏も北条氏・千葉氏らと伴に滅亡。 不幸にもそれらに巻き込まれていたならば。 しかし、殆どの千葉氏関連の武将を含め兵士達は帰農することで生命は安堵されているので、それだけでは農民として大きな存在として残っていたであろう。 各地の藩に召し抱えられた(武士としての再就職した)人達もいた。

④生実 原氏の末裔原胤信(胤義の嫡男、胤栄の孫※1)も旗本として徳川家に召し抱えられたが、キリスト教神者として生き抜こうとしたためキリスト教禁止令(1612年)のもと反逆者として磔の刑に処せられた(1623年)。 もし、中山氏が宗家の末裔胤信を擁護するような姿勢を見せていたならば、中山氏の没落もあったのではないかと考える。

(前出14頁の生実 原氏の系図を参照)

尤も江戸以前の黒砂については闇の中なので、何時の頃まで中山氏が統率者であったかなども全く分かっていない。 中山氏の主流はその前に岩井の方に帰着してしまっていたとも考えられる。

4．江戸時代の黒砂村と浅間神社

4 -1. 黒砂歴史の時代に

かくして江戸時代を迎える。　黒砂村が記録として最初に出てくるのが、1620(元和６)年の年貢割付帖(篠丸氏旧蔵文書)に黒砂村が見られる。

続いて 1664(寛文４)年 佐倉藩領知朱印状・領知目録に記載されている。　以後幕末まで佐倉藩だったと考えられる。

1670(寛文 10)年 穴川野における境界線争いの結果、稲毛・小中台・黒砂の境界線が「穴川野の裁許絵図」に見られる。

1687(貞享３)年 松尾芭蕉の『鹿島紀行』で成田、佐倉、千葉、を巡り江戸に帰る途中、黒砂の地で詠んだ俳句「ほととぎす鳴くやくろとの濱※2 ひさし」が載っている。

その他には 1697 年の「元禄９年 473 人により造立」という石仏が残っている。

(『黒砂 いま むかし』より引用)

これらは他所に遺っている文書であり、又村内でも他所(黒砂浅間神社以外)での石仏である。文書などは遺さなかったのか、度重なる火事で焼失してしまったのか、黒砂村には中世以前の記録・遺物がなく、近世に至っても石仏などを除いて幕末期まで記録としてのものは残されていないらしい。　佐倉藩領知目録にあるように江戸時代の始まりには 500 戸を越す村民が黒砂の谷間に暮らしていたことは確かなのである。

江戸時代以前の黒砂、将門落武者伝説の手掛かりは、これも言伝えでしかない「黒砂神社」、将門を祀ったと伝えられる黒砂神社を探るしかない。　しかしその黒砂神社に関するものも何も現存しないとなると、現在有る黒砂浅間神社の由緒に付いて調べる以外には今のところ手立ては掴めていない。

4 -2. 黒砂神社とは

言い伝えによると、村の鎮守として将門を祀った黒砂神社があったそうだが、何時の頃か浅間大神(あさまおおかみ)を勧請して、黒砂浅間神社になったと云う。　将門を祀った一遍やその後の経緯について記したものは、何もないらしい。　黒砂神社について云々するものがない以上、黒砂浅間神社の謂れから何かを探すしかないと思われる。

4-3. 黒砂浅間神社

神社案内書によると

御祭神

主祭神：木花開耶姫命(木花之開耶比賣命(このはなさくやひめのみこと))

末社：金刀比羅宮(大国主命・金山彦命)

稲荷神社、三峰社、天満宮、子安社、疱瘡社、厳島社、道祖社(八衢比古命・八衢比賣命※１)

(御室浅間社・磐長比命賣命)　※１:八衢比古命(やちまたひこのみこと)は 猿田彦命、八衢比売命は天宇受売命と同一神であり災いを遮る神とされ、道祖神として信仰されていた。

黒砂浅間神社の由緒沿革(抜粋)

1815(文化 12)年　浅間大菩薩を遷宮

1832(天保３)年　一の鳥居建立

1861(文久元)年　社殿再建・・・浅間大菩薩遷宮より 46 年目

1911(明治 44)年　稲毛台鎮座の天神社、道祖神社を合祀

1920(大正９)年　神社改築・・・再建より 59 年目

1973(昭和48)年　不審火により本殿焼失

1974(昭和49)年　社殿・社務所を再建

制作／黒砂浅間神社氏子総代・黒砂の資料保存する会(平成23年4月改定)

『黒砂いまむかし』に掲載されている黒砂浅間神社の紹介には「神社明細帳」よりとして

浅間社(村社)　千葉県管下下総国千葉郡黒砂村字干場

祭神：　木花之開耶比賣命

菅原道真霊　　明治44年6月25日　稲毛台の天神社を合祀

八衢比賣神・八衢比古神　　同上時　　同上の道祖神社を合祀

由緒：　不詳

境内神社:御室浅間社　　祭神:　**磐長比賣命**(いわながひめのみこと)

古事記では木花之開耶比賣命の姉に当たり、美人の妹に対して

疱瘡守護神　　祭神:　月夜見神

三峰社　　祭神:　不詳

琴平神社(金比羅社)　祭神:大国主命、金山彦命

黒砂浅間神社共々その由緒はいずれも不詳

神官：　明治12年1月11日

し掌　安藤一之進　　登渡神社　社掌兼務　星次光胤　安東良胤

昭和2年8月15日

粟飯原胤文

氏子戸数　　71戸

管轄距離　　一里四町十九間

(「黒砂いまむかし-Ⅱ黒砂の伝承と文化-黒砂浅間神社の沿革」より)

黒砂浅間神社の現状での由緒からは黒砂神社との関連は何処にも見当たらない。　1815年浅間大菩薩遷宮(の遷宮)と1861年社殿再建(遷宮から46年目)が気になるところである。

4-4. 黒砂浅間神社と稲毛浅間神社には何か違いがあるのでは？

黒砂浅間神社は稲毛浅間神社とどうも様子が違う。　祭神のことや神官について。建物も。

そこで、稲毛浅間神社や本宮の富士山の浅間神社について概略を調べてみよう。

稲毛浅間神社

祭神：**木花咲耶姫命**(このはなのさくやひめのみ)　　安産の神、子育ての神

配祀神

瓊々杵命(ににぎのみこと)　　国土平安・家内安全・産業発展の神様

猿田彦命　　交通安全・厄難解除の神様

創建：808年(大同3年)

大同3年(西暦808年)平城天皇の時代に、富士山本宮浅間大社（静岡県富士宮市）の御分霊を奉斎したのが稲毛浅間神社のはじまりと伝えられています。

治承4年(1180年)には源頼朝が東六郎胤頼を使者として御幣物を捧げて武運長久を祈願したのをはじめ、千葉常胤以来、代々の千葉氏の信仰が篤かったことが古記録から分かっています。

文治3年(1187年)に社殿を再建した時には、富士山の御姿にならって山を整え、富士山道のように三方の参道を山に設けました。　本社殿は東京湾の向こうの富士山を正面に望むように建立されています。

「稲毛浅間神社のお知らせ(由緒など)」から抜粋

浅間神社の大元　富士山本宮浅間大社

静岡県富士宮市大宮に鎮座する富士山本宮浅間大社について列記する。

祭神：**木花開耶姫命**(このはなのさくや)

ほか２ 柱を配祀

瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)　　天照大神の孫、木花開耶姫命の夫

大山祇神(おおやまつみのかみ)　　木花開耶姫命の父

由緒：垂仁天皇の時〔（神代垂仁３年(紀元前 27 年）〕、富士山の神霊をまつったのが始まりと伝える。

祭神の浅間大神については、富士山に関する最古の文献である都良香《富士山記》に，875 年(貞観 17 年 11 月 5 日)，山頂で白衣の美女２人が舞う姿を見たという記事があり，白い噴煙の立ち上るようすを表現していると思われる。　そしてこの山神に対して〈浅間大神〉と命名している。　後世、浅間大神は木花開耶姫（木花佐久夜毘売命このはなのさくやびめ）と同一視された。

社殿：神体は富士山とされ、富士山頂近くに奥殿がある(富士宮口からの終点)。　従って富士見宮市の神社には拝殿と幣殿(ぬさでん)だけで，本殿はない。

古代～近世において、延喜式内の名神大社とされ，駿河国の一宮。

浅間信仰の中心で、全国約 1300 社の浅間神社の総本宮。2013 年(平成 25)には富士山本宮浅間大社を含めた周辺の８社の神社が富士山域と富士五湖、忍野八海(おしのはっかい)等の構成資産とともに、「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産リストに登録された。

(平凡社世界大百科事典、日本大百科全書などから抜粋)

黒砂浅間神社と稲毛浅間神社の違い

主祭神は両社とも富士山本宮浅間大社と同じ木花開耶姫命(このはなのさくや)であるが、配祀神は富士本宮の「瓊瓊杵尊」、「大山祇神」に対して稲毛浅間神社の「瓊瓊杵尊」、「猿田彦命」であり、黒砂浅間神社は「菅原道真霊」や「道祖神」である。この黒砂の配祀神２柱は明治 44 年の黒砂台の他社からの合祀でこの際は問題外である。その代りかどうかは確かでないが、黒砂には「磐長比賣命」が境内摂社の「御室浅間社」に祀られているのと稲毛には「大山祇神」が摂社の「大宮神社」に、「磐長比賣命」が「小御嶽神社」に祀られている。

この違いは勧請した時期や元宮の違いからくるのではないかと思われる。

富士浅間神社から勧請されたといっても、富士山本宮浅間大社以外に登山道の須走口や吉田口に鎮座する東口本宮冨士浅間神社や北口本宮冨士浅間神社などの神社から勧請された場合も多くあった。　これは次項で述べる江戸時代に流行した富士講などによる参拝登山を通じて、地元に浅間神社を勧請した例が多く、特に静岡・山梨・関東各地に多くの浅間神社や富士塚が設けられた。

その多くが登山口にある神社に寄進がされ、そこからの勧請がなされたのである。　それぞれ神社にはその外部団体としての御師(おし)達が大活躍したという。　彼らは神社の各地方への宣伝役を務め、講の参拝者の宿泊など各種の世話や神社勧請の仲介などもしたと思われる。　これら神社は主祭神の木花開耶姫命は同じであるが、配祀神・相殿神とかいうその他２柱(神)が違っている場合がある。

因みに富士山登山口に位置する神社の祭神を記しておく。

・冨士宮口登山道　富士山本宮浅間神社

前出

・須走口登山道　東口本宮冨士浅間神社

祭 神：木花開耶姫命(このはなのさくや)

相殿神：大己貴命(おおなむちのみこと) 大国主神の別名の一

彦火火出見命(ひこほほでみのみこと) 木花開耶姫命の子、神武天皇の祖父

・吉田口登山道 北口本宮冨士浅間神社 (富士吉田市の新倉冨士浅間神社の祭神も同じ3柱)

祭 神：木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）

配祀神：天孫彦火瓊瓊杵命（てんそんひこほのににぎのみこと） - 夫神

大山祇神（おおやまづみのかみ） - 父神

・須走口登山道 （未 調） ※富士山四登山道： 富士宮口、御殿場口、須走口、吉田口

4 -5. 黒砂神社が浅間神社になったわけ

黒砂の地に浅間神社が勧請されたのは江戸時代後期の頃と思われる。 寺社の地方への進出は中世以降行なわれていることであるが、江戸時代になってからは、平和と生活の安定化がもたらす(全ての人が享受できたわけではないが)結果、娯楽としての旅と信仰が結びついて寺社詣でが盛んになる。 封建社会の中では自由に国境(関所)を越ることが、(特に女性は)困難であったが、団体での寺社参詣は許されていた。 それを利用してツアーガイド付の寺社参詣旅行として企画されたのが「講」で、企画に当たったのが「講社」あった。 全国の有名寺社が遠方からも人々を招くことで信仰拡大と寄進が期待され、民衆は信仰と旅行を楽しみ、講社等は信仰拡大はもちろんであるが、そのマネジメントや門前町の旅館・飲食店などの経営で生業を獲ていた。 この寺社の外郭団体として講の受け入れを担った人々を「御師(おし)」と呼ばれていた。 こういう寺社参詣の講として、関西の「お伊勢参り」、「熊野詣で」や関東では「出羽三山巡り」、「大山詣で」などが有名である。 そんな中で浅間信仰の富士山登拝を試みる「富士講」等の「講」が江戸時代大流行したという。 その結果各地に分祠された浅間神社が全国で 1300 社余を数えることになる。 黒砂浅間神社もその一つなのであろう。 境内にある『身禄碑』(慶應元(1865)年建立)はその一端を示している。

富士講 (富士山信仰の講社) 富士信仰、中世には修験道を中心に、関東・東海地方に富士信仰が形成されていた。近世初期に長谷川角行(はせがわかくぎょう 1541—1646 年)が教義を整え、その布教のために信徒組織をつくった。 富士山登拝と寄進がおもな目的である。 その後、食行身禄(じきぎょうみろく 1671～1733 年)が講社の発展を図り、江戸を中心に町人や農民に広く呼びかけた。先達(せんだつ)が霊験(れいげん)を説いて信徒を集め、先達に引率されて富士山に集団登拝するものである。 実際に登山できない人のためには、村内に神霊を分祀する浅間塚，富士塚などの遙拝(ようはい)所を設けられた。 関東にはいまも、富士山をかたどった富士塚や、登拝記念の石塔が数多くあり、地名に残ったものが多い。

岩科小一郎著『富士講の歴史——江戸庶民の山岳信仰』（1983・名著出版）などから抜粋

御 師 講で登拝した基点は富士山麓の大宮(富士宮市)，村山(富士市)，河口，吉田，須走などの登山道にある浅間神社を中心にしており，それぞれに御師(おし)がおり，信者の富士登拝の先達をした。

株式会社平凡社世界大百科事典 第2版から抜粋

長谷川角行 (1541—1646 年)

戦国末期から江戸初期の富士行者。 書行藤仏という行名でも知られる。 俗名は藤原左近武邦と伝えられるが真偽不明。 長崎出身。 自筆覚書によれば,18 歳で諸国をまわる行者となり,富士山麓の人穴で角材の上に立ち続ける苦行をして,富士の神霊仙見から衆生救済の霊力と呪文を授かり,以後も富士山や富士五湖などで水垢離や五穀断ちの修行を続け,さらに啓示を得た。角行は弟子たちと共に江戸や北関東で護符を配り,病気治しで信者を得た。 この信仰集団は分裂しつつも 18 世紀以降大発展し,その中から組織された「富士講」は江戸時代庶民信仰を代表するもののひとつとなった。 角行は,その開祖と仰がれ『御大行の巻』などの伝記が作られた(生没年はそれによる)。

食行身禄　(1671～1733 年)

富士講の指導者。 本名伊藤伊兵衛、食行身禄は行名。角行の四世ないし五世の弟子である富士行者月行創忡に弟子入りし修行。身禄は弥勒菩薩から採った名前。貧しい庶民に教線を拡げ「乞食身禄」と呼ばれた。63 歳の時、富士山七合五勺目(現在の吉田口八合目)にある烏帽子岩で断食行を行ない、35 日目に入定したという。 死後、娘や門人によって次々富士講は増えていった。 開祖角行とともに、身禄は信者の尊敬を集めた。 身禄は救世主、教祖的な存在として、現世に不満を抱く人々から熱狂的に迎え入れられ、新宗教団体としての「富士講」が誕生した。 後にあっちこっちに富士塚と呼ばれる小型の富士山が築かれ、実際の富士山に登らなくても、功徳が得られるとされたのである。　<参考文献> wikipedia の「長谷川角行」、「食行身禄」の説明から抜粋

もし黒砂将門落人伝説がなければ、江戸時代末期に黒砂村も「富士講」の世話で『浅間大神(菩薩)』を勧請し、黒砂浅間神社を創建したという、ごく普通の村の側面を見たということでしょう。

明治になって「講社」や「御師」などが廃止された結果、「講社」からの神主の紹介も途絶え、登渡神社の神主の世話になることになったのだろう。 登渡神社は元々妙見大菩薩を本尊とする寺であったが、浅間講も行なわれていたので関わりがあったのであろう。 しかし、古来から存在する稲毛浅間神社ではなく、登渡神社の世話になったのは何故なのだろう。 黒砂村と稲毛村には何か問題があったのだろうか。

由緒で少しひっかかるのは、1815 年(文化 12 年)に浅間大菩薩を遷宮したという一文です。 遷宮とは場所替えすることで、すでに浅間大神は何処か近くに祀られていて、それを遷宮したことを示すのか、または別の神さんを祀っていたが、富士講の薦めで浅間大菩薩に祀り替えたのではないでしょうか。 言伝えの中には江戸時代の後半に大火事で神社は焼けてしまい、その時いろいろな資料は焼失してしまったと伝えられています。 近年になって、1973 年(昭和 48 年)に不審火により本殿焼失とあり、その時点で江戸期後半からの資料も焼失して、全く資料のないため、由緒のない神社になってしまったそうです。 近年、「黒砂の資料を保存する会」によって個人の言伝えの話や他所の機関からの資料を参考にまとめ上げた『黒砂いまむかし』が唯一の作成資料と言えるでしょう。 そして現在神社に残されている、石碑等が歴史を物語る僅かな証拠なのでしょう。 それらが江戸時代の消息を伝えてくれているのか、私にとってはこれからの探索課題です。 『黒砂 いま むかし』においても明確には著述されていません。

今まで携わった中では伝説にたどり着く手掛かりは何も得ていません。 残された石碑・石仏などももう少し観察する必要も有るでしょう。 探索はまだまだこれからです。 黒砂界隈だけでなく茨城県の八千代町にも訪れたいものです。 今回の「黒砂将門落武者伝説」の探索は入口にたどり着いたところでしょう。 しかし、コロナ禍の中での活動としてはこの辺りでひとまず区切りをつけたいと思います。

[江戸時代になって落人伝説が出来たのか]

とにかく何の手掛かりもないまま、筆を下ろそうとして、また一つの仮説が浮かんで来ました。江戸時代の初めだろうか、村の過去を消してしまった方がこれからの村の行先には幸いするのではないかと。 落人の言伝えや将門を祀る黒砂神社の存在、そして戦国時代の中山殿のこと。 これらに関係するものを消してしまい、伝説として話だけを残して、黒砂の歴史を霧の中へ仕舞い込んだのではないかと。 頭の中はすっきりしないままなので、今一度仮説と課題を掲げて筆を置きたいと思います。

仮説：①将門軍の落武者六人(中山、高橋、渡辺、遠藤、山本、春山)が黒砂に逃込んだ。

②将門を祀る黒砂神社が存在した。

③黒砂には古代東海道が通っていて、1020 年には更級日記の作者が帰洛途中一泊した。

歴史的事実：

①江戸時代初期には黒砂村存在の記録(1620(元和６)年の年貢割付帖(篠丸氏旧蔵文書)、1664(寛文４)年 佐倉藩領知朱印状・領知目録)がある。

②1815 年には黒砂浅間神社が勧請された。

③黒砂村には 1697 年の「元禄９年 473 人により造立」という石仏等が残っている。

課題：①黒砂神社はいつ頃まで在ったのか。

1)中世に無くなった。2)江戸初期　3)黒砂浅間神社が創建される前

②将門霊が祀られていたのに、何故浅間神社を勧請しなければならなかったのか。

③隣の稲毛浅間神社を介して浅間神社を勧請しなかったのか。

④江戸時代から六人(中山、高橋、渡辺、遠藤、山本、春山)の名前があったのか。

⑤茨城県八千代町の中山さんとは関係があるのか。

⑥生実原氏の中山殿とは、 原氏について学び直す必要がある。

15～16 世紀の千葉界隈は原氏抜きでは語れない。　しかし、千葉氏を凌ぐ勢力を持った時期もあるといわれながら、その詳細は不明なところが多い。　出自も幾つかの説があり、途中も幾度かの存続の危機が訪れては身を隠し歴史の記録から消えていたりする。

伝説でもって伝説を解明出来ないのは当然である。　まずは原氏から解明しなければならないが、これも私の手に負えるものではない。　何か手掛かりが得られて、新たな考察を加えて書き続けられれば幸です。

後 書 き

最近探偵・刑事物ミステリーTV の観過ぎか、勝手な想像に任せて、話を作ってしまいがちです。伝説とか言伝えとか、事実の見えていない物に対しての話とはいえ、それらに関連する人やまじめに研究している人にとっては、甚だ迷惑なことであるかも知れません。　お気に障ることがあったならば、お許し下さい。

最近、青葉病院で偶然に黒砂の人と登戸の人に会いました。　友達にそんな話をしたら、「将門さまの霊に後押しされているんじゃない!! 頑張りなさいよ!」と笑いと激励を受けました。

春に稲毛図書館で黒砂の資料を探して、唯一の資料として『黒砂 いま むかし』を見つけ、借用が出来ないため、興味あるところをコピーして参考にしました。　その後黒砂公民館に寄ると、上記冊子以外にも資料が多数あり、再度訪問の必要ありと思いました。　しかし、この夏の暑さと長雨が出足をくじき、そのまま書き進めて、ほぼ終ったところで、稲毛図書館でコピーしていなかった部分を再見しようと訪れたところ、驚くことに『黒砂 いま むかし』の続編が３冊も並んでいるではないか!!　何で今になって増えたの？　　しかし、これらを読んでいると、まだまだ時間が掛かりそうなので、今回は目をそらしました。　とにかく穴部分を埋めることだけにしました。　探索を終えて結論にいたる前にはそれらの資料もよく読み込んで見るつもりです。

ここまで将門の落武者が黒砂にたどり着いたと思われる 940 年から江戸時代(1603 年)までを、想像に任せて書き進んできた。　落ち武者と黒砂の関わりを示す物は見いだせないが、黒砂村の生い立ち・歴史の中で唯一交錯している話がある。

「その夜は、くろとの濱といふ所に泊まる。　片つ方はひろ山なる所の、砂子はるばると･･･」

落武者の黒砂定着から 80 年余り経った頃、1020 年(寛仁４年９月 17 日)に前上総介菅原孝標一行が帰洛の途中に「くろとの濱※2」で一泊している。　その事を当時 13 歳の娘が 40 年後に更級日記にしたためている。

更級日記の「くろとの濱」の一節下記に綴る

はるばると白きに、松原茂りて、月いみじうあかきに、風の音もいみじう心細し。 人々をかしがりて歌よみなどするに、

”まどろまじこよひならではいつか見むくろどの濱の秋の夜の月”

和歌とそれを詠んだ周辺の僅かな情景や一行の人々の一夜の心持ちを記すのみで、村人との交歓などを窺わせるものは何も記されていない。 浜辺と丘の形態や行程の進み具合から推測するのみである。 しかし、13歳時の記憶を40年後に正確に覚えているかどうかの問題はある。

「くろとの濱」についても黒砂以外の候補地が幾多あり、黒砂でない可能性も多分にある。

更級日記の作者は黒砂で一泊したのだろうか

参 考 文 献

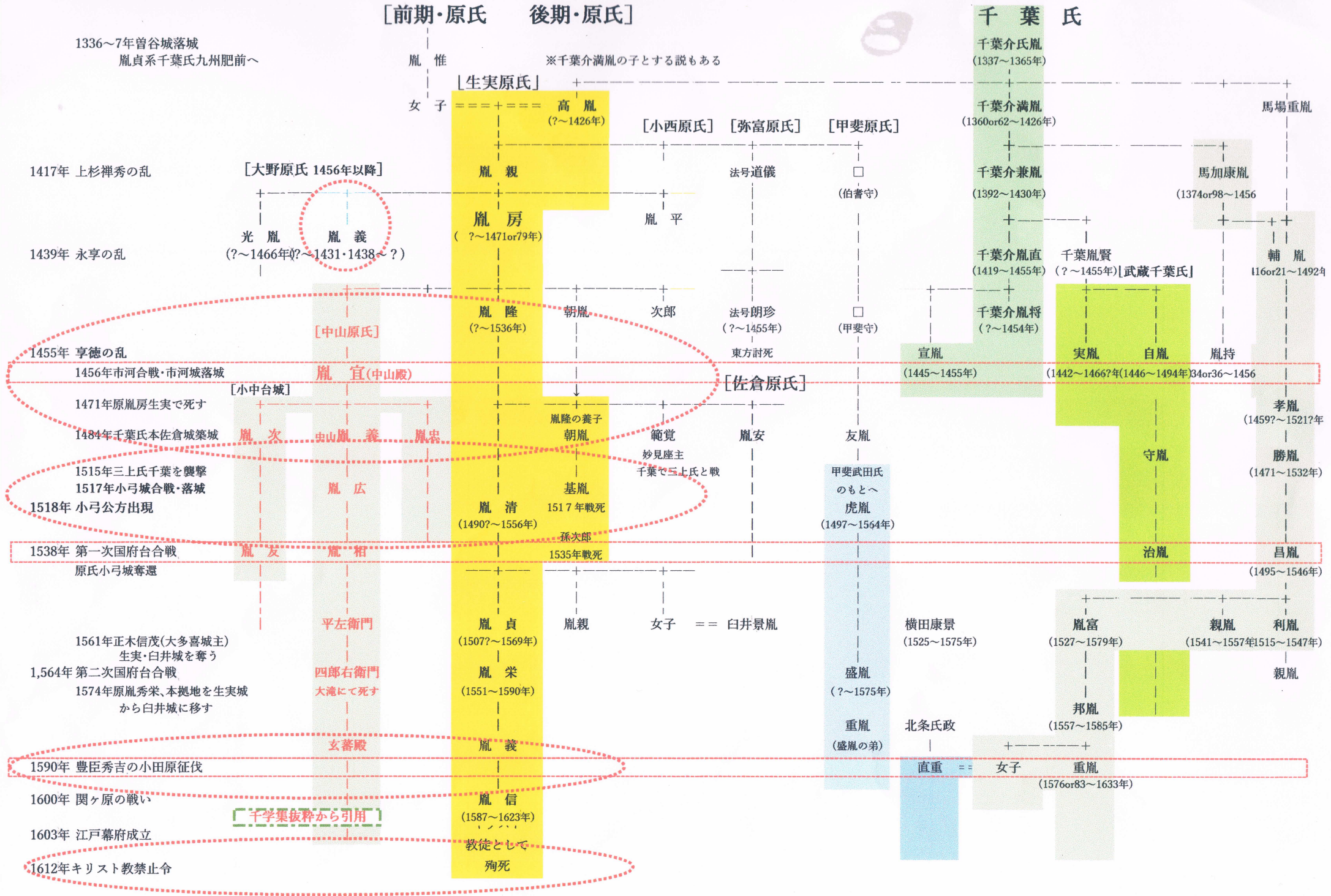
・『黒砂 いま むかし』 黒砂の資料を保存する会 編・著
・『千葉県の歴史』石井進 宇野俊一 編 山川出版社
・動乱の東国史1『平将門と東国武士団』鈴木哲雄 編・著 吉川弘文館
・『将門と忠常』千野原靖方 著 著崙書房
・『平将門の乱』福田豊彦 著 岩波新書
・『将門と常忠-千葉氏のルーツを探る-』千葉市立郷土博物館パネル展の解説リーフレット
・『下総小中台城について』 外山信司 著
・『千葉氏家宰「原氏」の歴史』 山内 博 著 「千葉氏を語る会」勉強会資料
・『世界文化遺産・富士山と関東の富士塚』舟坂昌幸 著 いなぎ会研究発表 2017.10.13

関連拙著冊子

・『近 場 の 古 道 探 索』
・『古代東海道「河曲駅(千葉)」の所在を考察する』

黒砂将門落武者逃走ルートを推理 940年時を想定
臼井方向
臼井道
黒砂奥隠れ谷
落ち武者逃走路の想定
黒砂
古代東海道(805年まで)
古代東海道(想定)
古代東海道(771年以降)
古代東海道(771年まで)
いけだの池
河曲駅
舟
若葉区
中央区
稲毛駅
穴川駅
みつわ台駅
作草部駅
千葉公園駅
京成千葉駅
西登戸駅
千葉市動物公園
千葉少年鑑別所
千葉財務事務所
千葉刑務所
千葉経済大
千葉大
護国神社
競輪場
貝塚IC
穴川IC
京成千葉線
東千葉
北
西
東
南

中世(1400～1600年頃)
生実原氏と
園生城
小中台城(中山殿)
東寺山(中山家)
中山城
福星寺城
吉岡城(木出城)
黒砂(中山家)
原町(原屋敷)
高品城
貝塚城
加曽利城
亥鼻城
城ノ腰城
多部田城
城山城
仁戸名
立堀城
平山城
柏崎砦
北生実城
長山砦
園生町
検見川町
真砂
稲毛
稲毛区
源町
若松町
吉岡
南波佐間
小倉町
下田町
都賀
小倉台
天台
穴川
作草部
貝塚
高品町
椿森
登戸
都町
加曽利町
坂月町
大草町
若葉
太田町
千城台東
金親町
千葉市
中央区
JFEスチール
千葉港
星久喜町
大宮町
大宮台
多部田町
仁戸名町
宮崎
大森台
川戸町
東山科町
佐和町
今井
大森町
花輪町
蘇我
大蔵寺町
平山町
鎌取町
辺田町
緑区
塩田町
生実町
稲毛海岸
磯辺
高洲
美浜区
稲毛駅
稲毛海岸駅
検見川浜駅
西千葉駅
東千葉駅
千葉駅
千葉中央駅
本千葉駅
千葉みなと駅
蘇我駅
鎌取駅
千城台駅
穴川IC
都賀駅
千葉東JCT
大宮IC
蘇我IC
京葉道路
京成千原線
千葉東金

生実原氏の系図

2022.11.15　野村の系図比較まとめ